

会議結果のお知らせ

1 開催した会議の名称

令和6年度第1回大分県立図書館協議会

2 開催日時

令和6年8月27日（火）14:00～15:30

3 開催場所

大分県立図書館 3階 特別会議室

4 出席者

(1) 委員（10名中9名出席）

佐藤(晃)委員長、大島委員、後藤委員、長尾委員、植田委員、甲斐委員、川原委員、浅野委員、佐藤(栄)委員

(2) 事務局

石掛大分県立図書館長、南副館長、馬場副館長兼学校・地域支援課長、増田総務企画課長、梅田サービス課長 増本郷土資料室長、ほか担当総括

5 公開、非公開の別

公開

6 傍聴人数

1名

7 議事

(1) 令和5年度事業実績について

(2) 令和5年度大分県立図書館重点目標の達成状況について

(3) その他

8 主な審議内容及び会議録の概要

●事務局説明

議事(1)(2)について、事務局から以下の資料に基づき、一括説明を行った。

- ・資料1：令和5年度事業実績
- ・資料2：令和5年度大分県立図書館運営の状況に関する評価

主な委員意見、回答は以下のとおり。

○委員意見

図書館の入館者数について、市町村ごとのデータを分析しているか。

●事務局回答

貸出冊数は分析できるが、入館者数は市町村別まではできていない。

○委員意見

他の市町村から来館することが難しいのであれば、相互貸出の部分を強化した方が良いのではないか。

●事務局回答

貸出冊数については大分市が8割、別府市が1割、その他が1割。

大分市の利用が多いが、それを補う形で協力貸出を行っており、県立図書館の本を市町村の図書館で受け取ることができるサービスを行っている。

○委員意見

資料1の24ページ(6)「社会教育の推進と生涯学習情報の提供」①のア「社会教育関係者を対象とした研修」とあるが、研修の内容はどのようなものか。

●事務局回答

「新任社会教育行政職員・新任社会教育主事研修」は、生涯学習とは何か、社会教育行政の基本についての研修を行った。

「社会教育主事専門研修」は、香々地青少年の家で、そこに勤務している社会教育主事の抱えている課題や、青少年教育の概要など、実務を含めた形の研修を行った。

「社会教育行政職員専門研修」は、大分大学の教員を講師として、地域社会における青少年の役割について講義を行った。

「県・市町村社会教育委員研修」は、社会教育総論と人権関係の知見を深める研修を行った。

「社会教育関係職員等合同研修」は、民間の方を講師として、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の発信についての研修を行った。

「公民館関係職員研修」は、コロナ禍からどう立ち直っていくかについて、熊本県や沖縄県の事例を中心に熊本大学の教員を講師に招いて講義を行った。

「公民館テーマ別研修」については、7月に障がい者学び支援の研修、9月に気象台の職員を招いて防災関係の研修を行った。

○委員意見

社会教育担当者に対する研修は、県教育委員会では、図書館が担うという認識

でよいか。

●事務局回答

図書館と社会教育課との2者で行っているが、公民館関係者や行政職員に対する研修については県立図書館が行っている。

学校運営協議会の関係者に対する研修や、地域の方が行う学びの教室や体験活動に対する研修については、社会教育課が行っている。

○委員意見

図書館の役割や、図書館の存在などについての市町村図書館職員に対する研修のようなものは、また別にあるのか。

●事務局意見

図書館職員に対する研修については、公立図書館等職員研修会で市町村立図書館職員や県立図書館職員を対象に、司書研修を行っている。

県立学校や市町村立学校の司書に対する研修は、大分県図書館大会を含めて手広く行っている。

○委員意見

「地域人材等育成研修参加者数」というのはどれを足した数字になるのか。

●事務局回答

資料1の24ページに出ている部分と、26ページの「やさしい日本語」活用推進事業の数字を足したものになる。

令和4年度の実績は2,008人、そして令和5年度が2,329人ということで、300人以上増えている。

○委員意見

地域人材等育成研修というのは、どのような人を対象としているのか。

●事務局回答

一般の生涯学習講座との違いになるが、地域における生涯学習や社会教育を推進していく人たち、つまり、市町村の職員や、市町村における学びの教室や体験活動で指導者やボランティア等をされている方達に対する研修として行っている。

○委員意見

大分県図書館大会で立命館大学教授の久野和子さんが、図書館をめぐる状況は、ICTやインターネット、さらには生成AIなどが加わることでこれまでと変わっており、その先にどのような図書館が必要かということをご提案してくれた。テーマが、「子どもの居場所としての図書館」ということで、図書館の役割が、情報の集積や提供にとどまらないという提案が興味深かった。

図書館に対する評価についても、変わっていくことをどう織り込むかというところを考えると、違う観点からの評価も必要なのではないか。

読書は人生を豊かにしてくれるということをかなり実感しているが、それを実感できるようになったのは、自分が詩を書いたり、発表したりする機会があるからで、図書館には、その知を集積し調べるという先の、発表するとか表現するということまで踏み込んだサービスの提供も検討してほしい。

これまでの実績から、より踏み込んで次の世代、さらに次の世代に向けた図書館として、利用者がそこで安心して過ごせる場づくりということも期待したい。

●事務局回答

なかなか回答が難しい大きな課題だと思うが、次回の運営ビジョン等にそのような視点を盛り込んでこれからの図書館活動について再度考えていきたい。

○委員意見

指標については、人口減少やコロナ禍のなかでは直接的な数ではなく、むしろ実態がどうなのかわかる方が良いのではないか。

例えば、大学生は卒業論文を書くときに、スマートフォンから県立図書館の蔵書を検索し本を選び、相互利用で大学のカウンターを通して借りている。

ただ、それは県立図書館の実績ではないのかというところではない。

若い人たちは、貸出数は少なくてもアクセス件数は高いということもある。

どのような指標が必要なかはわからないが、冊数や利用者数など直接的な数ではないものも検討してほしい。

○委員意見

資料2に(4)「市町村立図書館、学校図書館等支援」の協力貸出冊数19,186とあるが、子どもたちにとっては市町村の図書館を通して借りている感覚ではないか。もちろんこれは、県立図書館の実績として必要な数であるが、子ども室での貸出冊数にも含まれており、市町村の図書館、学校での貸出冊数にカウントされていると、2重3重で計上することになるのではないか。

正確には、(2)「子どもの読書活動の推進」の子ども室貸出冊数の中から、協力貸出冊数を差し引くことが必要ではないか。

指標の見直しも検討していただきたい。

○委員意見

資料2の(2)「子どもの読書活動の推進」について、コロナ禍が終わって、貸出冊数はもっと減っているのかと思っていたが、これだけしか減っていないのだと逆に思ったぐらいの数だった。

調べるだけの本ではなく、人生を豊かにする本というものに子どもたちが携わることができればいいなと思っている。その中でどのような本が貸し出されているかを疑問に思ったので教えてほしい。

●事務局回答

絵本であれば、例えば「はらぺこあおむし」、「ぐりとぐら」、「11ぴきのねこ」のシリーズなど、県立図書館の子ども室では一般的に人気のある長年読み継がれたものがベストテンに入っていた。「大ピンチずかん」なども入っている。

○委員意見

貸し出しが多い本を気かけると、子どもたちがどのような本を希望しているのか、どのようなところに困りを感じており、どのようなものが必要なかわかるので、図書館としても役に立つ情報になってくると思う。

今の時代、調べることが簡単になってきており、夏休みの宿題であっても、インターネットで答えを調べることができるようになっている。

そのような中、今後、図書館にはどのような役割があるのかということを考えていただけたら面白いと思う。評価とは別のことになるが、その奥に隠れているものまで考えていただけると面白いなと思う。

○委員意見

子どものためのおはなし会では、子どもたちは大体2～30分は部屋にとどまってくれて読み聞かせやわらべうたを聞いてくれるが、親が一緒だと1時間でも居てくれるような状況である。

おはなし会も、大人のためのおはなし会、季節ごとのおはなし会、外国語のおはなし会など、図書館の職員が考えて多様化している。

おはなし会がたくさんあるが、参加者がいないこともあるので、アピールの仕方も今までどおりではなく、SNSを使うなど広報の仕方を考えてもいいのではないか。

○委員意見

暑い中母親がベビーカーを押して熱したアプローチを帰っていくところを見ると、くつろぐ場、ちょっと休んで本を開こうかという空間があるといいなと思う。

○委員意見

近年は、非来館型で、大人でも子どもでもキーワードをパソコンやスマートフォンで入力すればすぐ検索できるようになっている。図書館の利用の仕方が変化が出てきており、非常にいいことだと思うが、それも良い面と悪い面と両方あるような気がしている。

やはり図書館に足を運ぶという経験を繰り返す中で、発見や驚きが身に付いていくものだと思う。実際に図書館に足を運んでもらい、自由に見たり触ったりする経験を多く積むことが必要だと思う。私が大学の図書館や県立図書館を最初見たときは、その大きさに圧倒されるような経験があった。現場に足を運んで、そうした驚きを小さい頃から繰り返し行うということが大事だと思う。

図書館に足を運ぶ機会を多く作ってもらうということを、小学校、中学校、高校に働きかけることが将来的な図書館の利用者を増やすきっかけにもなるのではないか。

○委員意見

文字には力があり、文字というものを読まなければ頭の中で広がってこない世界があるのだと思っている。そのために図書館があり、文字で書かれた本があるはずで、その文字を読むことによって世界が広がるということを、どのようにアピールしていったらいいかということが今後の問題ではないか。

例えば YouTube で今のおすすめ図書の冒頭部分だけでも話しをすとか、読書会をすとかがよいのではないか。図書館は、回り道をして自分の欲しい世界を求める体験ができる場所ではないかと思う。

あまり近代化ということばかりでなく、もう少しオーソドックスに文字というものを考えていただければうれしいと思う。

○委員意見

言葉を知るということは、子どもたちが学習するときに必要なことで、本を読んでいると言葉を知っている分、友達との関係づくりもうまくいくと思っている。学校で実際に読み聞かせをしていると、子どもたちは喜ぶが、自分で本を借りて読むようになるまでには、そこは担任の力が必要になると思う。どのようにして、県立図書館の本を学校に受け入れることができるかを考えているところである。

●事務局説明

議事（3）について、事務局から以下の資料に基づき説明を行った。

- ・豊の国情報ライブラリー開館 30 周年記念事業について（資料3）

●事務局説明

令和6年度の重点目標について以下の資料に基づき説明を行い、それに対

する評価指標について意見を求めた。

- ・令和 6 年度の基本方針及び重点目標
- ・令和 5 年度の基本方針及び重点目標

主な委員意見は以下のとおり。

○委員意見

評価指標については、6 年度の重点目標で新しく項目設定されている(1)「情報発信の充実」では、ホームページや SNS での情報発信件数とかが一つの参考になるのではないか。

もう一つは、新しい取り組みを何件始めたかというようなことではないか。時代に合った新しい提案というのは大切だと思うので、そういう件数もあげても良いのではないか。

○委員意見

委員が思っていることと、事務局側が提案することとかなりずれ違いがあるのではないか。

今日の委員の話では、図書館がどういう場所であって欲しいかという提案が多かった。文字によって広がる創造性や、豊かな読書体験をどう深めるかとか、創造力を喚起するような図書館が欲しいと思う。

読書文化を広げるとか、読書体験を深めるということは、県立図書館の主要なテーマとして、もう 1 つ項目を作ってもいいぐらいではないか。

今後、計画を考えるとすると、読書体験を深めたり、読書によって人生を深めたりする、そのような観点で来館者を増やすというイメージをもっと打ち出しても良いのではないか。